

黒ナイル

畑山 博



中央公論社

黒ナイル

畑山 博



黒ナイル

定価一三〇〇円

昭和五十九年十月十五日印刷
昭和五十九年十月二十五日発行

著者 畑山 博

発行者 嶋中 鵬二

印刷所 三晃印刷

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二一八一七

振替東京二一三四

©一九八四 検印廃止

ISBN4-12-001340-5

目次

第一章	真夜中のメルヘン	5
-----	----------	---

第二章	ホルスの神話	71
-----	--------	----

第三章	大地の受胎	134
-----	-------	-----

黒
ナ
イ
ル

第一章 真夜中のメルヘン

1

君よ

たかが生きるということが

どうしてそんなに大げさに

死と対比されなければならない

事柄だろう

それはただ

死の騒々しい変容にしか

すぎないのに

一九九〇年夏。

人びとの身体から滲み出す汗が、たちまち乾ききった粉になって沈澱しつづけているような午後だった。

ニューヨーク市ブロンクス区ファンキー街四十二丁目。シリンダー錠前蒐集家ジム・スキナーは、自宅に近い地下鉄（そのあたりでは地上線になっている）の跨線橋からとつぜん飛び下り自殺を図り、全身打撲で九カ月の重傷を負った。

動機はまったくなかった。

ただ何事かに吸い寄せられるように、と彼は病院の医師たちに訴えた。

「ほんとうにそれだけなんだ。わたしはただ、いつもの午後の習慣通り散歩してただけなんだ……」

ミイラのようにぐるぐる巻きにされた包帯の奥から錆び色の血を滲ませながら、Mrs スキナーは言った。

「ほんとにそれだけなんだ……それなのに、気がついたとき、わたしはもう、あの跨線橋の手すりに足をかけて、またがってしまっていたんだ……」

同日同時刻。

ネバダ州ラスヴェガス市。

その一日前、砂嵐の中で乗っていた定期バスが崖から転落し、一人だけ奇跡的に助けられた二

十二歳の女子大学生が、入院先の州立病院の窓からダイビング自殺をとげていた。

また同時刻。

北ポーランド、グダニスク市。

当地の新港建設計画地に近い骨材プラント企業の第十八夜間作業現場で、双子の男児の父であり、二日後にその子たちの四度目の誕生日をひかえた技術者が、とつぜん自殺を図るという事件が起こった。

うなりをあげて碎石製造中のブレイキクラッシャーの中へ飛び下りて下肢粉碎の重傷を負った技師は、当局の事情聴取に対し、おれには分からない、何も分からないと絶叫するばかりだった。

註・北ドイツ、ブレーメン。ロンドン。

他十七都市よりの同じく発信報告略。

同時刻（日本時間午前二時）。

東京中央駅八重洲口地下モータープールで、一人の少年がエレベーターの中に閉じこめられて叫んでいた。

少年の名は鳴主^{なぐ}。十二歳。

自宅は立川市にあり、父親は大きな外科医院を経営している。が、番町小学校へ越境入学するため、母親と二人で都心にマンションを借りている。

少年の一日のスケジュールは、その母親から分刻みで監視されていたから、本来ならばそんな

時刻、そんな場所にいるはずはない。

なのに、その日、少年の部屋のインコが死んだのだった。

新教育法に憑かれている母親は、マンションの十二畳分の広さがある少年の勉強部屋に、書棚と机と仮眠ベッド、食卓の他は置かせなかった。

少年がインコを飼った鳥籠は、だから、スライド式の天井まである大きな本箱の奥の棚に隠してあったのだった。

午後十時。その日のスケジュールがすべて終り、母親がノートと小びんの中の整脳剤リジンの数を点検し、部屋を出て行くと、やおら少年は本箱の扉を開ける。

少年に馴らされ、それまで十八時間剝製のようにおとなしくしていたセキセイインコ（ブルー）は、世界中の海がそこに閉じられて騒ぐさなみみたいに胸毛をふるわせながら飛び出してくる。

初め臆病そうに革表紙の百科事典の上に飛び下りたインコは、くぐもった声を長く引き伸ばして鳴く。

それから少年の掌に乗り、少年がもうずっと使っていない手動エンピツ削り器の中に隠してある餌をさいそくする。

掌をついばむくちばし。くちばしにつくかな鳥の唾液（？）。

すると少年は、たまらなく小鳥がいとしくなって、カーテンを大きく開ける。

厚いガラス窓の向こうに、乾いた夜景が展けている。

そしてそれから朝まで少年が眠る間、インコは低い翅音をたてて、ずっと窓枠の少し広くなつたところを歩きつづけるのだ。

ところが、その夜、少年のインコは、書棚の奥から出てこなかった。胸毛をからからに乾かし、全体がひとまわり小さくなって目を閉じて、小鳥は死んでいるのだった。

「今朝、学校へ出かける前には確かに生きていたのに……」

少年は息をつめた。

慎重にまさぐって見たのだが傷はない。でも頭骨が折れているのだろう。首だけがぐっくりと落ちて、ひねると幾らでも回すことが出来る。

「母さんの仕業だ」

少年は、中指に光る指輪をはめた母親の手を思った。

少年がとつぜん目を充血させて枕やプラスチックコップを投げはじめたので、母親が駆けつけた。

「ぼくの小鳥が殺された」

ドアのノブを握り、必死に押し戻しながら少年は叫んだ。

母親にとって、そんな少年の抵抗は予想外のことだった。高飛車な口調から一転しておろおろ声になって、彼女は言った。

「何よ。小鳥が一羽死んだくらいで。そんなに言うなら、かわりを買ってあげます。もっと大きくてよく鳴く鳥を買ってあげます……」

「……死んだのは、この鳥なのに」

少年は叫び返した。

小鳥をシャツの内側に入れ、片手でしっかり肌を押しつつながら、少年はマンションを飛び出した。

夜の街。

走るたび、少しずつ少年の汗を吸って重くなる小鳥の身体。

地下鉄に乗る金を持っていなかったのに、駅員の隙を見て赤坂見附駅の改札口を突破した。ほんとうは電車になど乗らず駆けつづけるだけでもよかったのに、どうしてか少年は改札口の柵をジャンプしたのだ。

ステンレス製のまばゆく光る柵を乗り越えた瞬間から、少年の記憶は錯綜しはじめた。人混みの中を逃げて行くのに、妙に埃臭い静止した彫像の間を駆けぬけてゆくような感じがあった。

周囲の時間と、駆けている自分の時間がずれはじめているのではないかと少年は思った。

轟々と走りつづける電車の音が、トンネルに付着した錆を舞い上げ、後方に吹き飛ばしてゆく。それがいつもの光景のはずだった。

それなのに、なぜか少年は、吹き飛ばされてゆくのが単に剝離した壁のセメントや錆だけではなくて、目の前を塞いでいるはずの「時間」そのものみたいだと感じたのだ。

が、そんな感触もしかし、その夜に起こった事柄全体からみたら、単なる序の口程度のものでしかなかった。

終電にはまだ少し間のある時刻。丸の内線の妙に赤っぽい内装がほどこされた旧式車輛の中で、そういえばそんな少年を見かけたという証言がある。

少年は、草色に白いストライプの入った半袖セーラー服に、ニッカボッカ様の半ズボンをはいて、いかにも確かな目的のあるもののように走っていた。そう。電車の中で走っていたというのである。

赤坂見附駅では少年を追う改札係員はいなかった。が、少年の下りた東京駅の改札口では、た

またま交替時刻で二人いた駅員の一人が、怒鳴りながら少年を追いかけている。

少年が逃げた経路が、八重洲への連絡トンネルをくぐり、その途中、業務用支路への鉄扉を押し開けて消えた、とする駅員の証言は、その後のモータープールでの証言とも符合する。

二三時〇二分。業務用支路に入った少年は、前方からやってきた保線の駅員たちの目から逃れるために床にあった丸蓋を上げ、鉄ばしごを伝ってさらに下の階に下りた。

夥しい配電盤や送風機の連なる総合機械室の中を、少年はしだいに追いつめられながら逃げつづけた。

地下四層。ちょうど地域ビル総合監視室の厚い壁の裏手にあたるあたりだった。焦げた油の臭いが充満した変圧器を覆っている金網柵に身体をこすりつけながら、少年は逃げていた。

二層。いや、三層分ほどぶち抜きになった大機械室だった。その外れに、さらに下層へ下りてゆく鉄ばしごが見え、少年はそれに取りつこうとした。怒号が背後から追ってきた。

すべては薄明りの中で起こった出来事だった。少年が盛り上っている床のケーブルにつまずき、顛倒したのはそのときだった。

シャツの裾が急にベルトからはみ出したのかもしれない。少年のインコがコンクリートの床に落ちた。

はっとしてそれを拾い上げたところまで少年は覚えていた。

いや、それを拾い、鉄ばしごの方に身を乗り出して足場を確保するために、小鳥を傍の切り換え機のところの置いたところまでだ。

やや古くなった架線のあの黒い油滓が滲みだした。たまに郊外の実家へ行くときに乗る電車の中から、隣の線の架線をずっと見上げつづけることが少年は好きだった。ちょうどそんな色をした

むき出しの銅線が目に入って、一瞬少年は懐かしかったのかもしれない。

ぼっという爆発音がして小鳥が燃え、とつぜん周囲が真暗になった。

身体をのけぞらせながら落ちて行く感触のごく初めの部分だけを、かすかに少年は思い出すことが出来る。

数時間だったのか、数秒間なのか、少年には分からなかった。意識を失くしていたというのではない。少年の身体はズール族の埋葬死体のように膝を曲げ、くるくると回りながら転落しつづけていた。

いや、もう少し正確にいうと、身体中の細胞が、何か知らないふしぎな鋭い網目のようなもので切り刻まれてゆく感触だった。

細胞の一粒ずつが、その網目をくぐるたびに表皮をめくられ、裏返しにされてゆくような感じだった。

そうしながら、全体がとめどなく加速をつけて、落ちてゆく。

物が落ちるあの引力の加速よりさらに激しい加速をつけて落ちてゆく――。

暗闇のパニック

東京中央駅周辺、二時間にわたって停電

原因不明数カ所で連鎖ショート

同じころ、地下街は、後にいっせいに新聞でそう報じられることになる大停電に見舞われていた。

随所でトランス、予備発電機の燃料タンクなどが爆発し、入り組んだ地下の排気孔や点検孔を通じて煙が地下街に流れ出した。

その騒ぎの最中に発生した火事騒ぎ四件。消防車の出動で水びたしになった名店街の売り場面積二百平方メートル。非常階段のコルナーで下敷きになり肋骨を負った老人他、全治二カ月以上の重傷者十九人。軽傷者三百八十人。他に傷害による負傷者四人。死者一人。強奪事件八件。

電灯がつき、騒ぎがやっと鎮静した午前二時。モータープールの開かないエレベーターの中に子どもが閉じこめられているという通報が入った。

十数分後、レスキュー隊が駆けつけたとき、絶叫する男児の声が盛んに聞こえていた。

が、結局ドアは開かないので上の階から隊員たちもぐりこみ、エレベーターの天井蓋を開けて救出しようとした。

しかし、少年はいなかった。

金具が壊れていたので切断機を持ちこみ、天井蓋を開けた隊員は、こう証言した。

「アセチレン切断機で穴を開ける間中、われわれは励ましつづけたのですよ。そうして、『この真下にくるな』と叫びつづけたのですよ。下から応答はありません。言葉は分らないけれど呻いていたのですよ」

その証言は、ドアの外にいた者たちの言葉とも一致している。
なのに、

「開けたら誰もいないのですよ。そのくせ、エレベーターの中からは、声だけが、まだ聞こえつづけているんですよ」

レスキュー隊員は言うのである。

エレベーターの底には揚げ蓋はなかったので、隊員たちはさらに床を破って穴の底部を捜してみなければならなかった。

が、そこにも少年はいなかった。

ただ叫び声だけが、厚いコンクリート床の底からわあんとひびいてくるだけだった。

2

初めに気がついたとき、少年は、自分の身体が冷たく硬い岩の裂け目に落ちこんでいるのだと思った。

が、だんだん意識がはっきりしてくるにつれて、どうやら少し違うと気がつきはじめた。

落ちこんだ岩の裂け目で自分もがいているというより、周囲の方が動いている。むしろ自分よりもっと意志的に周囲の岩が動き、自分の頭や肩を絞めあげようとしていると気づいたのだ。それは奇妙な感覚だった。自分の身体は背も脇の部分も、どんな凹部までも周囲の岩と隙間なく密着している。まるで砂地の中にでもいるように。

それなのにそれは実際には黒曜石みたいに硬いのだ。

いや違う。ぼんやりと目が慣れてくると、周囲は赤黒く今にも燃え出しそうな色をしている。そのくせひどくひんやりしている。そんな洞窟の底に、身体を半ば岩に閉じられた形で、少年はあお向けに倒れていた。

いや、あお向けというのとも少し違う。片膝を立て、身体を大きくねじり、顔面は左半分を岩に押しつけられて、唇も鼻もほとんど動かさない状態なのだ。